

I 学校の概要

個を活かす協働的な学びの推進モデル校事業

綾川町立滝宮小学校

◆児童数及び教員数

○児童数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	特別支援	全 校
2学級 61名	2学級 66名	2学級 64名	2学級 47名	2学級 67名	2学級 53名	3学級 12名	15学級 370名

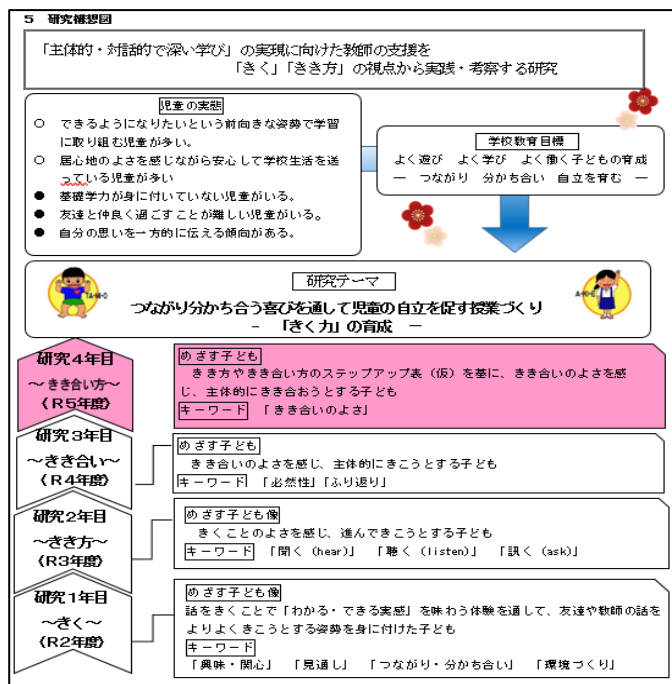
○教員数 25名

◆学校の特徴

滝宮校区は、昨今、新しい住宅地が広がり、子どもの教育に関する多様化も見られ、個別最適化及び協働的な学びが求められている。

右図の本校の教育目標を受け、令和2年度より、「話す力」「伝える力」「きく力」の3つの児童のコミュニケーション力に着目し、取り組みを進め、成果が現れ始めている。

昨年度の児童自己評価では、「友達と話合おうとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができる」と感じている割合は90%を超え、高い結果となっており、全児童に「きくこと」の意識付けが図られるとともに、きこうとする意欲も高まっている。



II 研究主題等

研究主題 つながり分かち合う喜びを通して 児童の自立を促す授業づくり（4年次）
— 「きく力」の育成 —

◆研究主題設定の理由

中教審答申を受け、香川県教育委員会からは、「個を活かす協働的な学び」の重要性が示された。その実現に向け、本校では、「きく力」を大切にしている。昨年度の県学習状況調査・児童質問紙においてより主体的に「きく」内容である「分からないことは…質問して解決していますか」に対して、「している」と回答した割合は、全体の27%程度にとどまっている。「きくことのよさ」や「分かる・できる」実感を十分に味わえていない児童が少なくない。きく力を段階的に高めるとともに、きき合うことで主体的に課題解決することをめざして、本研究主題を設定し、自立を促す授業づくりを継続的に進めていきたいと考えた。

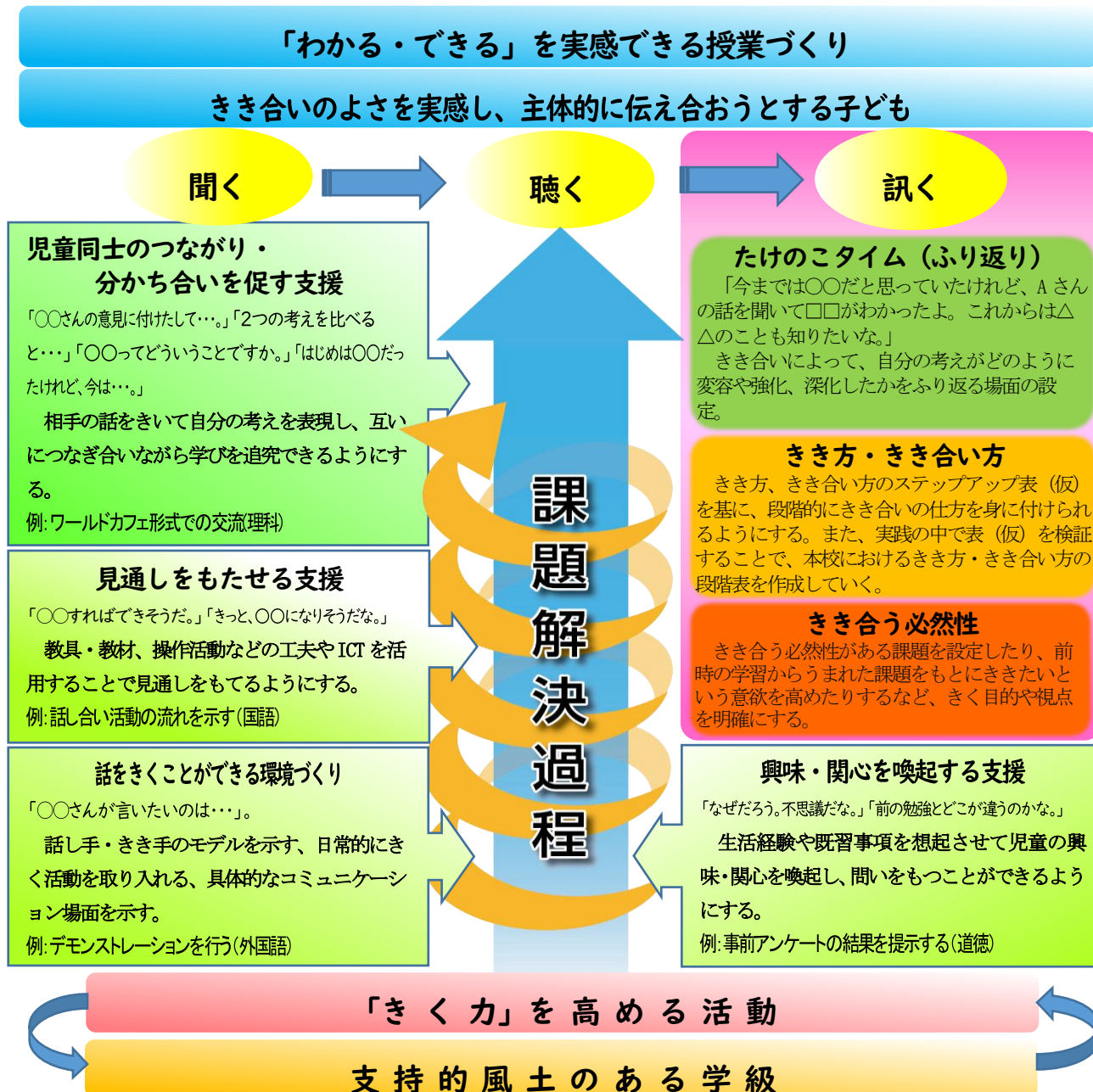
◆研究内容及び方法

(1) 研究仮説

段階的にきく力を身に付けることは、きき合いのよさを実感できることにつながるだろう。

昨年度は、「きくことのよさ」を実感し、教科のねらいである「わかる・できる」を達成していきたいと考え、研究を進めてきた。本年度も、学習指導における4つの支援を意識しつつ「児童同士のつながり・分かち合いを促す支援」を核として「きき合う必然性」を活動の中で生み出し、児童が「問いかけ」を行いながら学習を広げたり、深めたりする授業をめざしたい。そのために、段階的な「きき方」「きき合い方」の指導について検証したり、きき合ったことを振り返る活動をさらに充実させたりすることで、一人一人が「きくことのよさ」や「わかる・できる実感」を味わうことができるような教師の支援について探求する。

(2) 研究構想図



※ 3つの「きく」

聞く (hear) 一方向	聴く (listen) 半双方向	訊く (ask) 双方向
日常的に行っている一般的なきき方。意識していなくても、自分の関心ごとであればきくことができる。	話し手の真意(話の内容・気持ち)を正確に受け取ろうとするきき方(傾聴)。話し手との良好な人間関係を築くことができる。	質問や問いかけを行いながら深い意味や背景を探っていくきき方。話し手と能動的に関わることでより多くの情報を得ることができ相互理解が深まる。新たな考えを生み出すこともできる。

(3) 研究の進め方

低・中・高学年から構成する「学習指導三部会」を設置する。指導案検討や授業の準備・部会内での授業実践、指導案修正後、全体での事前検討(模擬授業形式)・研究授業・まとめを行う。部会全員で授業づくりを進め、深まりのある研究授業にするとともに、各学級の授業改善に生かす。

授業討議では、「きき合いのよさ」の実感に向け、きき合う必然性」を活動に設定し、「きき方・きき合い方」及び「たけのこタイム」(ふり返り)等の支援を工夫し、それらの支援の有効性について検証し、協働的に討議する。そして、その授業で見られた成果を次の研究授業に生かしたり、課題となったことを解決したりするよう、連続性のある授業研究を行う。

Ⅲ 研究実践

◆指標設定と達成に向けた取り組み

- 1 (校内児童アンケート) 授業では、学級やグループの中で自分たちで課題を立て、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して発表する学習活動に取り組んでいますか。

指標 「①取り組んでいる+②どちらかと言えば取り組んでいる」の合計



指標の達成に向けた実践

○ 児童の興味・関心を喚起する支援の工夫

「なぜだろう。不思議だな。」「前の勉強とどこが違うのかな。」など、生活経験や既習事項を想起させて児童の興味・関心を喚起し、問いをもたせることが、課題解決の意欲につながる。その際に、どのように一人一人に働きかけ、「気になる。やってみよう」という気持ちを高めるのが大切だと考える。また、「友達の考えをきいてみたい。一緒に考えたい。」ときき合いの必然性を促す活動になるよう工夫したい。

実践1 児童が考えたくなる学習課題の設定(第5学年 体育科「けがの防止」) ※校内研究授業

けがの発生原因や防止の方法について理解するとともに、けがをした時には、症状の悪化を防ぐために適切な手立てを行い、自らの命を守り安全な生活を送ることの大切さを学習する。

そこで校外学習での野外活動に向け、「救急セットに入れる物を選ぶ」という学習課題を設定した。児童はそれぞれ、既習事項やこれまでの生活経験から、道具を選択していた。この時、選ぶ数を2つだけに制限することで、より自分事として、根拠をもって考えられるようにし、タブレットPCを活用して何を選んだのか分かりやすく提示した。(写真①)その後のきき合いでは、互いの相違点や関連性を共有し効果的な問い返しを行うなど、必然性をもって意見を交流することができた。(写真②)きき合いの後、友達の考えのよさに気づき、考えが変わったり、友達の反応を受けて、自分の考えに自信をもったりする児童の姿が見られた。



写真①【それぞれの考えを可視化】

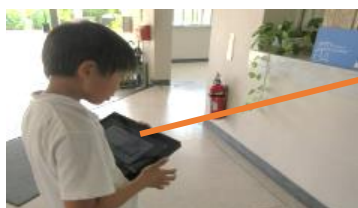


写真②【きき合いの様子】

実践2 自分たちの生活とつながる学習活動の工夫(第3学年 社会科「火事から暮らしを守る」)

火災から人々の暮らしを守るために、消防署と関係機関、地域の人々が連携・協力して、緊急時に対処していることや日頃から火災の防止に努めていること、それらの人々の工夫や努力を捉え、今後自分がしていきたいことを考えていく。

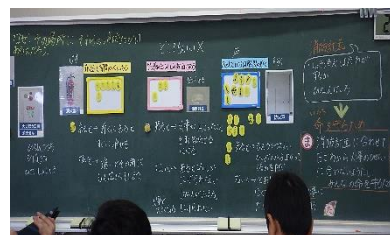
まず、学校の中にある消防設備の場所を調べるための校内探検の活動を設定した。(写真③)そして見つけた消防設備を役割ごとに分類したり、校内の見取り図にまとめたりさせることで、児童から「この設備は、何のためにあるのかな」「どうしてこの場所に設置されているのかな」という疑問が生まれ、学習課題へとつながっていった。(写真④)その後、それぞれが選択した消防設備について、調べたり考えたりしたことをきき合う活動では、同じ物を選んだ友達と考えを共有したり、違うものを選んだ友達の考えを興味深くきいたりしていた。



写真③【タブレットPCを持って、校内探検】



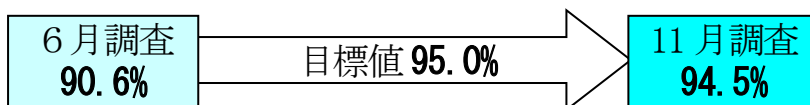
写真④【消防設備の場所をマークした見取り図】



写真⑤【本時の板書】

2（校内児童アンケート） 普段の授業では、学級の友達との間で、きき合う活動をよく行っていると思いますか。

指標 「①思う＋②どちらかと言えば思う」の合計



指標の達成に向けた実践

○ 進んで「きき合おう」とする態度につながる支援の工夫

学習課題の解決に向けて、自分だけでなく、進んで友達と関わり、考えをきき合い、自らの考えを深めたり広げたりしていこうという児童の意識を高めるためには、まず、それぞれが自分の考えをもっていることや、それが図や言葉などの目に見える形で表現されていること、きき合うことで多様な考えに触れ、児童自身が、課題解決に近づいたと実感できるように支援することなどが大切である。

実践1 自他の思いや考えを可視化するための表現物

（第1学年 道徳科「みんななかよく（教材名『みらいくんのえ』）」

教材文から、親しいかどうかで態度を変える主人公みらいくんに着目させることで、私心にとらわれず誰にでも分け隔てなく接することや、公正・公平に接することのよさに気付くことをねらいとしている。

児童が多様な考え方、感じ方に接する中で考えを深め判断し、表現する力を育むことが求められるが、発達段階からもこの時期（6月）の児童に考えたことや感じたことを言語化し、互いの思いをきき合わせることは難しい。そこで文章で表現するのではなく、見せてもらえなかった時のげんきくんの表情を想像し、ワークシート（資料⑥）に描き入れ、それを見せ合いながら、ペアでのきき合いを行うことで、主人公に向き合い、中心価値に迫った。



資料⑥

【表情を描き入れ、考えを可視化するワークシート】

実践2 友達との会話に安心して臨むための相手意識（第4学年 外国語活動「I like Mondays.」）

児童がこれまで習得してきた外国語を使って、自分の好きな曜日やその理由を伝え合う活動を通して、外国語に親しむとともに児童相互のコミュニケーション能力を育てることをねらいとしている。

友達との会話をスムーズに行うために、あらかじめ誰と会話をするのか決めておき、その友達が好きな曜日を予想しておいた。会話を通して予想したことが合っているかどうかを確認することで、次もききたいという意欲につながるようにした。（写真⑦）また、なぜその曜日が好きなのかについては、日本語で自由にきき合うことで、相手理解を深めることができたようにした。



写真⑦

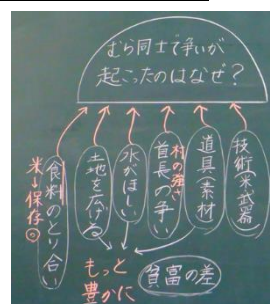
【ワークシートを用いて

ペアできき合う様子】

実践3 課題解決のための思考ツールの効果的な活用（第6学年 社会科「国づくりへの歩み」）

大昔の日本でむらからくにへと変化したことについて理解するとともに、資料を用いて情報を調べ、考えたことを表現できるようにすることをねらいとしている。

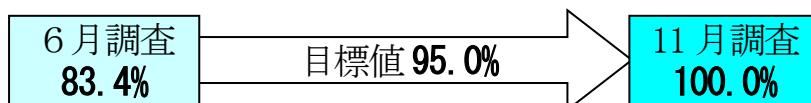
弥生時代に争いが起こった理由を考える学習活動では、より多面的に思考することができるように、クラゲチャートに自分の考えを書くようにした。それを用いてきき合いをし、自分と異なる考えがあった際には、別の色で付け足していくよう促した。そうすることで、自分にはなかった新しい考えに気付き、きき合いのよさを感じることに繋がった。



写真⑧【全体でまとめたクラゲチャート】

3（校内教員アンケート） 授業の中で、児童同士のつながり・分かち合いを促す支援を意識して行っていますか。

指標 「①よく行っている＋②どちらかと言えば行っている」の合計



指標の達成に向けた実践

○ 児童同士のつながり・分かち合いを促す支援の工夫

相手の話をきいて自分の考えを表現し、互いの考えをつなぎながら学びを追究しようとするのが、協働して学ぶよさへの気づきにつながると考え、ペアやグループ、全体でのきき合いの活性化のための効果的な支援を探った。

実践1 問い返しにつながるきき合う視点の提示（第2学年 算数科「図を使って考えよう(1)」）

※校内研究授業

逆思考の場面において、テープ図のかき方を理解する。問題場面を図に表し、数量の関係に着目して、加法や減法になる場面の理解を深めることをねらいとしている。問題に沿ってテープ図に表すことで正しく立式したり、問題の構造をつかみやすくしたりと、テープ図の有効性にも気付かせたい。

2年生の児童にとって、どのようにきき合うことが友達とつながり、分かち合うことにつながるのかを想定し、「なるほどレベル」として提示した。そして、それぞれがめざすレベルを決めてきき合いを行うと、「〇〇さんは、どんな式になりましたか。」「どうしてその式にしたのですか。」「それは、～ということですか。」など、なるほど！と納得できるまで意欲的にきき合うことを意識してやり取りしようとする児童が増えた。（写真⑨）



写真⑨【ペアできき合う様子】

たけのこタイム		() さん 名まえ ()
日付	なるとど「と」を、思うまで、友だちの話を「聞くこと」ができた。	・〇〇さんの考えをきいて～…をつづしの～がわかったよ！
月	😊 😊 😊	
日		
月	😊 😊 😊	

資料⑩【ふり返りのワークシート】

実践2 「受け入れる」「認める」ことを大切にしたいきき合いの場の設定

（第4学年 道徳科「ゆるす心の広さ（教材名『へらぶなつり』）」

※校内研究授業

教材文から、広い心で自分と異なる人の立場を受け入れることの大切さを考える。自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、相手の言葉の裏側にある思いを知り相手への理解を深め、自分と異なる意見も大切にすることでよりよい友達関係を築くことができると考える。

事前に、友達の失敗によって自分に不利益があったらどう思うかのアンケートを行い、心の数直線として集計した。児童によって考え方や感じ方が違うことを知り、なぜ自分と違う考えがあるのか、ということから本時の学習課題につなげた。また、心情を表す円（心情円）で、揺れ動く心の様子を視覚的に表すことができるようにした。（写真⑪）



写真⑪【心情円を使ってきき合う様子】

きき合う活動では、広い心で相手の考えを受け入れるという本時の道徳的価値との関連も図り、きき合いの「なるほどレベル」を提示した。許す・許せないという違う立場の相手の考えを理解することが大切であると考え、「なるほどレベル」には、「自分の意見も相手の意見も大切に認め合う」ことも目標として設定した。互いの考えをきくだけでなく、違いに気づき、認め合い受け止めてきき合うことができ、授業後の学校生活にもつながっている。

昨年度の実践を受け、今年度からどの学年、教科でも、「たけのこタイム」というふり返りを積み重ねている（板書・ノート・ワークシートには~~た~~と表示）。単元によっては、ふり返りのための一覧表のワークシートを作成し記入できるように工夫したことで、自己の気づきや変容、成長を実感することにつながっている。（写真⑬）また、振り返る際に、「友達から学んだこと」という視点を提示したり、「なるほどレベル」の達成度と関連付けて振り返るよう助言したりすることで、きき合いのよさを実感することができるようにした。「〇〇さんの考えをきいて、…が分かった」「□□さんの…という考えにおどろいた」など、児童のふり返りの中に友達の名前が多く見られるようになっている。

◆特徴的な取り組み

○「きく力」を高める活動

朝の活動や学級活動の時間を活用し、学習指導を支える「きく力・きき合う力」を高める活動を実践した。「きき合う」ためには、疑問に思ったことを質問したり、答えたりと双方向に伝え合うことが大切である。ゲーム感覚で取り組める活動を選ぶことで、児童の「ききたい」という意欲を高めつつ、きき方やきく姿勢を身に付けることにつながっている。

活動例1 10 ヒントゲーム

〈ねらい〉 質問に回答しながら答えを予想する活動を通して、注目する視点をもつ力を育てる。

〈活動の仕方〉

- ① 紙に言葉を書き、代表の人の背中に貼る。代表の人は、何が書かれているか、代表以外の人に見せて立つ。
- ② 代表の人に10この質問をする。代表の人は、自分の答えに対するみんなの反応を見ながら、少しずつ答えを予想する。(写真⑭)
- ③ 代表の人は、10この質問のやり取りの後、背中に書かれた言葉が何だったかを当てる。当てたら代表の勝ち。

それは、生き物ですか。

はい、生き物です。



おおーっ！
(合ってるなあ！)

写真⑭

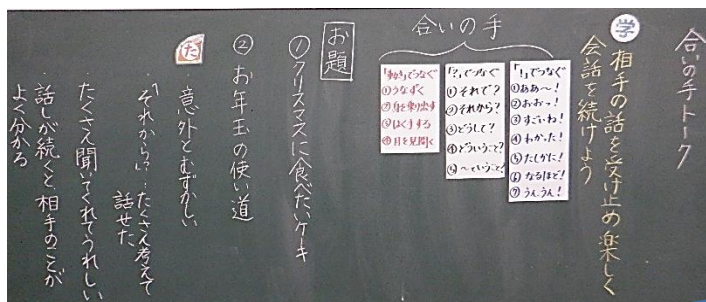
【学級全体で実施した
10 ヒントゲームの様子】

活動例2 合いの手トーク

〈ねらい〉 様々な話題について「合いの手カード」を活用しながら対話することで、相手の話を受け止め、楽しく話をつなぐ力を育てる。

〈活動の仕方〉

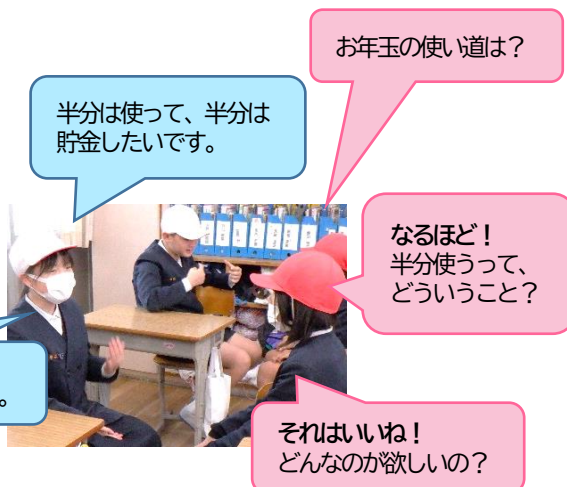
- ① 「合いの手」とは何か説明し、「合いの手カード」を提示する。(写真⑮)
- ② 話すテーマを決める。
(例：クリスマスに食べたいケーキ、休日にしたこと、無人島に持って行きたいもの など)
- ③ 2分間、途切れることなく話し続けられるように、話す人は、きく人が「もっとききたいな」と思ってくれるように、工夫して話す。また、きく人は、話す人が「もっと話したいな」と思うように、合いの手を入れる。(写真⑯)



写真⑮

【合いの手カードの例とふり返し】

まだ決めていないけれど、
新しいバスケットシューズが欲しいです。



写真⑯

【ペアで実施した合いの手トークの様子:お年玉の使い道】

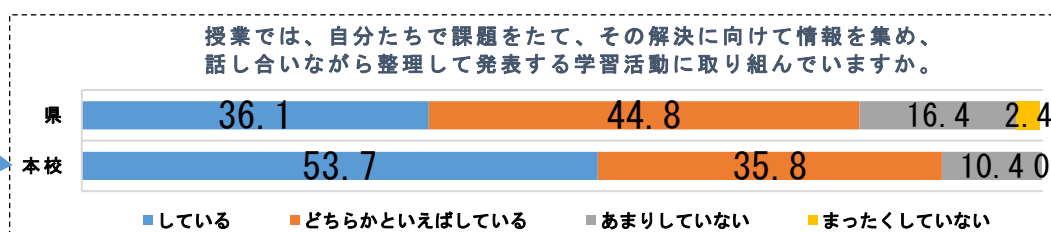
※参考文献：『6年間まるっとおまかせ！短時間でパットできる国語遊び大辞典』
(編者：『授業力&学級経営力』編集部、明治図書出版)

IV 研究の成果と課題

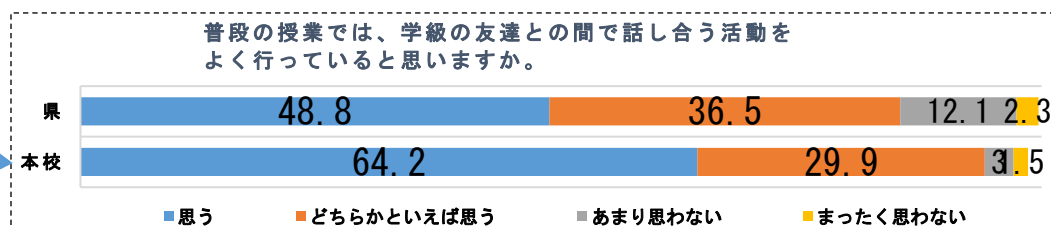
<成果>

- 今年度、「きき合い・きき合い方のステップアップ表」を作成し活用した。その表をもとにして、教員がめざす児童の姿を具体的にイメージしながら学習を展開することができた。昨年度に引き続き、提案授業では、香川大学の先生にご指導をいただき、「きき合い」を効果的に取り入れた学習展開の工夫や「きくことのよさ、わかる・できるを実感できるふり返し」などについての研究がより深まった。
- きき合いの到達目標として、児童の発達段階や実態、教科や学習内容に応じた「なるほどレベル」を設定し児童に提示した。それを活用し、「きく必然性」をもった学習活動を展開することで、児童が自らの成長や変容を自覚するとともに、きき合いの価値を実感することにつながった。
また、「なるほどレベル」を意識させることで、その目標達成に向けて、意欲的にきき合い活動に取り組む姿が見られた。課題解決に困った時は、友達と考えを出し合い、互いに問いかけを行いながら一緒に考えるなど、きき合いに対する意識が変わり、自信をもって学習に向き合う児童が増えた。
- 6月と11月の教職員の意識調査を比べると、「児童が課題を設定し、きき合い、まとめ、表現する学習活動を取り入れている」と肯定的に答えた教員が増えており、きき合う活動を重視し、児童にきき合うよさを感じさせたいという視点で、授業改善に取り組む教員集団となっている。
- 今年度の県学習状況調査・児童質問紙における、協働的な学びに関する項目においても県平均を上回る回答が得られた。

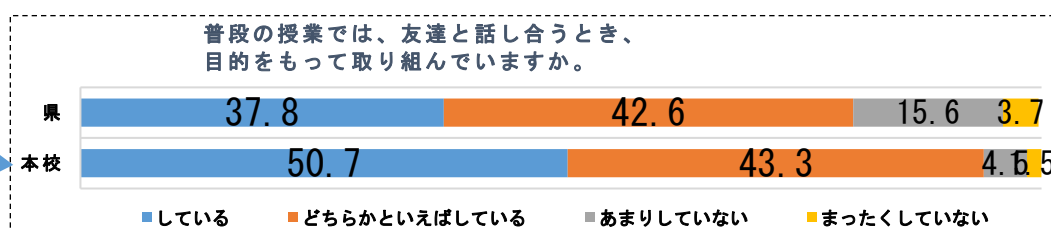
「している」と
回答した割合
県平均 +17.6



「思う」と
回答した割合
県平均 +15.4



「している」と
回答した割合
県平均 +12.9



<課題>

- きき合うことが学習の目的ではなく、課題解決につながる手段になるような取り組みを、今後も追求していく必要がある。困ったときに問う（きく）ことができる児童の姿をめざすとともに、協働的な学びの中で、それぞれの教科の見方・考え方を培う支援の在り方も探求していきたいと考えている。
- 意図的に「きく力」を高める活動の場を設け、授業の中だけでなく、日常活動の中に「きくこと・きき合うこと」の意識付けや価値付けを行っていく。

そして、教育活動全体を通し、きき合う活動を積極的に取り入れ、「きくこと・きき合うこと」を習慣化できるようにし、児童がいきいきと自分の言葉で語り、互いにきき合い、他者理解や人間関係調整力を高め、支持的風土のある学級・学校を構築していきたいと考えている。

◆資料「きき方・きき合い方のステップアップ表」

	きき方	きき合い方
段階 1	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話し手の話に興味をもつ。 ・ 話し手の方を向いてきく。 ・ うなずきながらきく。 ・ 最後まで黙ってきき切る。 ・ 大事なことを落とさずにきく。 ・ 共感的にきく。 <p>(途中で否定的な反応をしない)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話題に沿ってきき合う。 ・ きき手と話し手がアイコンタクトをとれる。 ・ 尋ねたり、応答したりグループできき合って考えを一つにまとめたりできる。 ・ 分からないことを質問できる。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 相手の考えを求める。 「～さんは、どう考えましたか。」 ・ 考えの理由をきき合う。 「どうして～と考えたのですか。」 ・ 不明な点を確認する。 「もう一度言ってください。」 	
段階 2	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話し手の目を見て、うなずきながらきく。 ・ 話し手の考えに意思表示をする。 ・ 自分の意見と人の意見を比べながらきく。 ・ 友達の考えをきき、その考えを取り入れながら自分の考えにつなげようとする。 ・ 自分の考えをもち、友達の考えを自分のものに取り入れながらきく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 進行に沿ってきき合う。 ・ 互いの考えを比較し、共通点や差異点を明確にしながらきき合う。 ・ よりよい考えを導くために、きき手・話し手が双方向性に高め合う。 (経験・既習・根拠等をもとに) ・ 学級全体できき合って、考えをまとめたり、意見を述べ合ったりできる。 ・ 相手の質問を受けてきき合う。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 不明な点を確認する。 「～とはどういうことですか。」 ・ 分かったことを確認する。 「～は、・・・ということですか。」 	
段階 3	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話し手に応じて適切にうなずいたり、返事をしたりする。 ・ 自分の意見と人の意見を比べ認める。 ・ 自分の意見と他人の意見を比べ、共通点や相違点を見付けながらきく。 ・ 話し手の工夫や内容を評価しながらきく。 ・ 自分の考えを深めたり、新たな考えを生み出したり目的意識をもってきく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 互いの立場や意図をはっきりさせながら計画的にきき合う。 ・ 相手の意見をきいたうえで、自分の考えを論理的に主張する。 ・ 互いに相手を受容し、尊重してきき合う。 ・ 分からない点や確認する点を質問し合う。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 共感的に受け止める 「～は、・・・ということですね。」 	